

水産の窓

30年-No.26

平成30年9月25日

～ サバ類の漁況と秋漁の予測 ～

茨城県水産試験場

1. 近年の水揚量の推移と資源状況

北部まき網によるサバ類水揚量は年によって大きく変動してきましたが、平成26年以降は20～30万トンで安定しています(図1)。その理由として、平成25年に100億尾を超える卓越年級群が発生し、この資源に対し漁獲圧が過剰とにならないよう休漁に取り組んだ結果が考えられます。また、平成25年以降に加入した年級群は平成24年以前の年級群と比べて同年級比較で約5cm小さくなっており、この原因として資源量の増加に伴って餌の競合等による成長の遅れが考えられます。

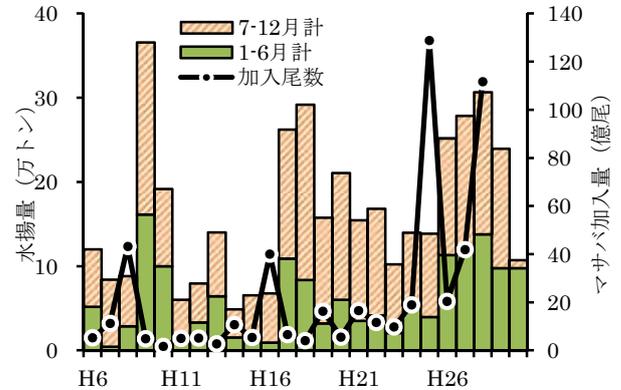


図1 北部まき網サバ類水揚量とマサバ加入量

(平成30年の水揚量は9月25日までの速報値)

2. 7～9月の漁況

北部太平洋まき網による7～9月のサバ類水揚量は、10.0千トンと前年(5.4千トン)を上回っています。海域ごとの漁況の概要は以下のとおりです。

○銚子沖～常磐南部：7月に今年生まれのサバを主体に漁獲され、前年を上回りました。

○金華山沖～三陸南部：わずかに漁場が形成されましたが、前年同様に低調でした。

○三陸北部～八戸沖：7月下旬に一時的にまとまった漁場が形成され、それ以降、漁獲量は減少したものの漁場が継続して形成され、前年を上回っています。

○道東沖：9月25日現在、サバの漁獲はありません。

3. 9～12月の漁況予測

北部まき網による1～6月のサバ類水揚量と9～12月のサバ類水揚量との間には正の関係があります(図2)。今年1～6月の水揚量は前年並の9.8万トンでしたので(図1)、この関係から今年9～12月の水揚量は前年並の13万トン前後と予測できます。

近年は親潮系冷水の三陸沿岸への差し込みに伴ってマサバが南下・集群し、漁況が好転する傾向にあります。今年の親潮面積は平年と比べて小さく、さらに三陸沖には暖水塊があるため、本格的な来遊は11月以降となる見通しです。

魚体については、前年の秋漁で主体となった平成25年生まれのマサバ5歳魚(体重400g前後)と、ほぼ同サイズの4歳魚(平成26年生まれ)が主体となり、これらに0～3歳魚(体重100～300g前後)と6歳以上(体重500g以上)が混じると考えられます。平成25年以降に生まれたマサバは成長が遅れているものの、前年秋に漁獲された体重350～450gの粗脂肪量は平均で20%程度あり、今秋も脂ののったおいしいマサバが期待できると考えられます。

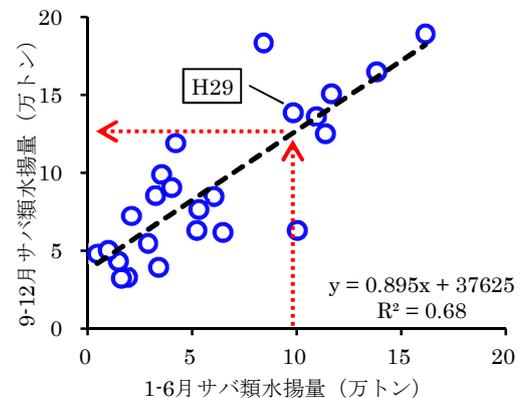


図2 北部まき網1～6月サバ類水揚量と9～12月サバ類水揚量の関係

★秋漁予測のまとめ

- ・ 今期の秋漁は、前年並の13万トン前後の漁獲となる。
- ・ 本格的な来遊は11月以降となる。
- ・ 漁獲サイズは、体重400g前後を主体に、300g以下と500g以上が混じる。

(回遊性資源部 多賀)